

【旧約聖書日課】民数記 9章15～23節

¹⁵幕屋を建てた日、雲は掟の天幕である幕屋を覆った。夕方になると、それは幕屋の上にあつて、朝まで燃える火のように見えた。¹⁶いつもこのようであつて、雲は幕屋を覆い、夜は燃える火のように見えた。¹⁷この雲が天幕を離れて昇ると、それと共にイスラエルの人々は旅立ち、雲が一つの場所にとどまると、そこに宿営した。¹⁸イスラエルの人々は主の命令によって旅立ち、主の命令によって宿営した。雲が幕屋の上にとどまっている間、彼らは宿営していた。¹⁹雲が長い日数、幕屋の上にとどまり続けることがあつても、イスラエルの人々は主の言いつけを守り、旅立つことをしなかった。²⁰雲が幕屋の上にわずかな日数しかとどまらないこともあつたが、そのときも彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。²¹雲が夕方から朝までしかとどまらず、朝になって、雲が昇ると、彼らは旅立った。昼であれ、夜であれ、雲が昇れば、彼らは旅立った。²²二日でも、一か月でも、何日でも、雲が幕屋の上にとどまり続ける間、イスラエルの人々はそこにとどまり、旅立つことをしなかった。そして雲が昇れば、彼らは旅立った。²³彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。彼らはモーセを通してなされた主の命令に従い、主の言いつけを守つた。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 1章1～9節

¹神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となつたパウロと、兄弟ソステネから、²コリントにある神の教会へ、すなわち、至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ。イエス・キリストは、この人たちとわたしたちの主であります。³わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

⁴わたしは、あなたがたがキリスト・イエスによって神の恵みを受けたことについて、いつもわたしの神に感謝しています。⁵あなたがたはキリストに結ばれ、あらゆる言葉、あらゆる知識において、すべての点で豊かにされています。⁶こうして、キリストについての証しがあなたがたの間で確かなものとなつたので、⁷その結果、あなたがたは賜物に何一つ欠けるところがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れを待ち望んでいます。⁸主も最後まであなたがたをしっかりと支えて、わたしたちの主イエス・キリストの目に、非のうちどころのない者にしてください。⁹神は真実な方です。この神によって、あなたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。

【福音書日課】ルカによる福音書 4章16～30節

¹⁶イエスはお育ちになつたナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになつた。¹⁷預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとどまつた。

¹⁸「主の霊がわたしの上におられる。

貧しい人に福音を告げ知らせるために、
主がわたしに油を注がれたからである。」

主がわたしを遣わされたのは、
捕らわれている人に解放を、
目の見えない人に視力の回復を告げ、
圧迫されている人を自由にし、

19 主の恵みの年を告げるためである。」

20 イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。21 そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。22 皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」23 イエスは言われた。「きつと、あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」24 そして、言われた。「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。25 確かに言っておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯で大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、26 エリヤはその中のだれのもとにも遣わされなくて、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた。」27 また、預言者エリシャの時代に、イスラエルには重い皮膚病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」28 これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、29 総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。30 しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。

「この聖書の言葉は…」【こども説教のために】

わたしたちが日曜日ごとに教会に集まり礼拝にあずかるように、主イエスも週ごとに巡り来る安息日（土曜日）に会堂を訪れ礼拝にあずかられていました。集まる曜日は違っても、わたしたちは、主イエスが毎週あずかられていらした礼拝に、同じようにあずかっているのです。

故郷ナザレの村に帰って来られたときも、主イエスは、安息日の会堂に足を運び、村の人々と共に礼拝にあずかられました。久しぶりに帰郷した主イエスを、村の人々は歓迎したのでしょうか。大切な聖書朗読の役割を託しました。かつてこの村で学んだとおりに聖書の朗読をし、勧めを語ってくれるはずだと、だれもが期待したはずです。そして、期待通り立派に朗読しお語りになる主イエスを、村の人々は、ほめたのです。

主イエスはそのとき、「イザヤ書」の巻物を渡されて、その中から朗読されました。そして、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」とお語りになられたといえます。主イエスは、礼拝で聖書が朗読され聞かれるとき、御言葉が「実現している」とおっしゃられたのです。

わたしたちの礼拝でも、聖書が朗読され聞かれるとき、御言葉が「実現」しています。神のお語りくださることに耳を傾ける者たちが共に集められて一つにされていることこそ、御言葉が「実現」しているしるしなのです。

「主の恵み」を告げる

日曜日の礼拝においでになられる皆さんの中に、帰り際、ご挨拶とともに「説教をありがとうございます」とおっしゃってくださる方があります。たしかに、牧師は、日曜日の礼拝のために毎回、説教の準備をして臨みます。準備が佳境に入る土曜日には、どこの教会の牧師も、普段より余裕なく過ごしているものです。そして、熱心に説教の準備をすればするほど、説教は長くなり、礼拝に占める割合は大きくなります。皆さんが、日曜日の朝、寝不足気味の牧師に「ご苦労さま」と労わずにいられなくなるのも、当然かもしれません。

けれども、わたしは牧師としていつも思うのです。日曜日の礼拝でお聞きくださった説教を、皆さんが、家まで持って帰られる必要はない、と。礼拝の終了と共に、教会に置いていってくださって良い、と。ただ、今日の礼拝で聞いた聖書の言葉をこそ、しっかり携え持ってお帰りいただきたい、と。

主イエスが故郷ナザレの会堂で安息日の礼拝にあずかられたとき、イザヤ書の朗読をされた後、どのような勧め（説教）をお語りになられたのか、詳しいことは伝えられていません。ただ一言だけを、福音書は伝えました。「**この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した。**」

もちろん、これだけ語って終わられたのではなかったのでしょうか。福音書も、この言葉がお語りになられた話しのはじめの一言であったと伝えているのです。この後に続いて語られたことが、無駄話だったわけではないでしょう。けれども、主イエスのお語りになられたことの中で、聞いた者の中に残されたのは、この一言だけで十分だったということなのでしょう。

これは、朗読された聖書の言葉を解説したり、解釈してみせたり、他のたとえで語り直したりした言葉ではありません。朗読された聖書の言葉そのものが、今日、この礼拝で耳にした者たちの間で実現している、と言われたのです。続く教えが語られるのを待つ人々に、朗読で聞いた聖書の言葉にとどまるようにと、主イエスは、真っ先にお告げになられた、ということなのではないでしょうか。

主イエスのお語りになられた言葉は、「**恵み深い言葉**」であったといます。直訳すれば「恵みの言葉」です。主イエスが朗読された聖書の言葉にもあるように、主イエスがそこでなさったのは、「主の恵みを告げること」でした。神が恵みとしてお与えくださることをお示しになることでした。神が恵みをもってわたしたちにしてくださいること、捕らわれている人が解放され、目の見えない人の視力が回復し、圧迫されている人が自由にされること。礼拝に集められ、神の言葉を共に聞く者たちの間で、その恵みの出来事が始まっている、起こっていると、主イエスは宣言なさった、というのです。

わたしたちの間を通り抜けて…

主イエスは、ご自分の同郷の者たち、また同胞であるユダヤ人の社会を、どのようにご覧になられていらしたのでしょうか。主イエスが目の当たりにされていたのは、いったい、何だったのでしょうか。

安息日の会堂に集まってきていたのは、ユダヤ人として生まれ、ユダヤ人として同じ村に生き、同じ価値観を持って生きていると、お互いに当然視して来ていた人々でした。けれども、主イエスの時代、ユダヤ人として、その社会にはさまざまな歪みがあり、亀裂があり、実際には、皆、自分のことで精いっぱい生き方をしていたのです。

皆、何かに捕らわれていました。自分の利益になる者とは付き合っても、そうでない者は、存在しないも同然のように、見えていませんでした。何かに圧迫されるように、狭いところに押し込められていました。主イエスには、故郷ナザレの人々が、そのような時代の中でもがいている姿を見ていたのではないのでしょうか。そうであればこそ、彼らが「他の人たちにしたように、自分たちのためにもしてくれ」と、自分の利益ばかりを求めようとする本音を言い当ててしまい、彼らの怒りを買ってしまったのではないのでしょうか。

モーセがエジプトから導き出した人々は、シナイ山で「律法」を授与されて主なる神と「契約」を結んだ民になったとされます。

この人々は、実のところ、一つの民族、一つの国民、と言えるような集団ではありませんでした。エジプトでファラオの支配の下、それぞれが自分と家族の生きることに精一杯で、他の者のことを慮る余裕のない生き方をしていた種々雑多な人々であったのです（出エジプト記 12 章など）。この人々と共に旅をするために、神がモーセに命じて作らせたのが、「幕屋」でした。「**掟の天幕**」とも呼ばれています。この幕屋の前に立って、モーセは神を礼拝し、神の言葉を聞きました。その礼拝に、人々は共に加わるように呼びかけられました。一つの群れとして共に旅を続けるために、彼らは、ただ主なる神の前に共に立つ者であることを、繰り返し確かめるように教えられたのです。

主イエスは、ナザレの人々のもとから出て行かれました。「異邦のやもめのため、異邦の病人のため、自分たちではなく他の者のためにする」とおっしゃって、出て行かれたのです。主イエスは、彼らを見捨てられたのでしょうか。いいえ、彼らを招かれているのです。主イエスは、彼らの間を通り抜けて行かれます。「自分たちのため」と願う者の間を、通り抜けて行かれます。ご自分の行く道、切り拓かれる「神の国」という世界に、招かれるためです。

それは、わたしたちへの招きでもあるのです。「他の者のために生きる」道に共に行く者を、主イエスは招かれているのです。